

聖書箇所 ローマの信徒への手紙 15章 14節

「兄弟たち、あなた方自身は善意に満ち、あらゆる知識で満たされ、互いに戒めあうことができるよこの私は確信しています」

かつて私は、この教会でも、「福音温泉」と題した説教させていただきました。実は、私はこの題の説教を、初めて仕えた兵庫県の小さな教会で初めてして以来、時々思い出したように、「福音温泉」という題の説教をしてまいりました。

繰り返しになるかもしれませんが、「福音温泉」という題の説教の内容を初めに申し上げます。それは、初めて教会に飛び込んだ頃の私にとって、教会は風呂のようだったという話です。青年になった頃、私の心はがちがちの殻に閉じこめられていました。ああせねばならない、こうせねばならない、ああ、それなのに私は何という情けない有り様だろうと、焦っていたのです。私には心の風呂が必要でした。それが教会でした。教会は風呂みたいでした。もはや私は、そこで競争する必要はありませんでした。私は教会で何か難しいことを学んだから救われたのではありません。愛をもって接してくれる優しい人の心に触れて救われたのです。本当に教会は風呂でした。私は教会という風呂の湯船に、虚栄心や競争心という鎧甲やうわっぱり、そして下着まで全部脱ぎ捨てて、裸の心になってどっぷりつかったのです。

まことに福音には分け隔てはありません。分け隔てがないこと自体が福音です。だからこそ、福音は人を生かします。私は、今、この教会こそは、福音という湯がこんこんと湧き出て溢れる風呂であって欲しいと願っています。「朝湯こんこんあふるる真ん中のわたくし」。自由律の俳人種田山頭火の句です。そんなぐあいには愛の湯がこんこんと湧いて溢れる教会でありたいものです。もし今、体も心も凝り固まって、頑なになって疲れはて青息吐息で生きている人がいるなら、私達一人一人が福音温泉の愛の湯になって、その人を招き入れましょう。この福音温泉の湯は、つかりすぎてのぼせるということがありませんから、安心して人に勧めることができます。

概ね、以上のような内容の説教を、私はこれまで、あちらこちらの教会で、何度もしてまいりました。そして今も、教会が福音温泉であるという気持ちは変わりません。

ただ、教会は福音温泉であると同時に、切磋琢磨の場であるということも確認したいと、本日は思います。そのために、初めにお読みいただいたローマの信徒への手紙 15章 14節のパウロ先生の言葉は示唆深いものがございます。

「兄弟たち、あなた方自身は善意に満ち、あらゆる知識で満たされ、互いに戒めあうことができるよこの私は確信しています」

このようにパウロ先生は仰っています。

ところで、あなたは自分を善人だとお思いでしょうか。世の中には自他共に許す善人というものが存在します。もちろん他人からは善人だという評価を受けられないけれども、自分では善人だと思っている人もいます。この善人ほど始末の悪いものはありません。なぜ

なら、善人は自分は善だと信じてやまないからです。善人は、自分のやっていることを善だと信じて、自分を疑うということがありません。そして、そういう善人こそ、困ったことをたくさんしでかすのです。最近もそういう善人の言葉が、ニュースで紹介されていました。その人の名は、宮崎勉といいます。もう43歳になったそうです。彼は、1988年から89年にかけて連続幼女誘拐殺人事件をおこしました。そして、殺人などの罪に問われ、17日に最高裁で死刑の判決を言い渡されました。彼は判決の出る前日に、臨床心理士との面会に応じていました。面会は東京拘置所で約20分間だったといいます。面会したのは東海女子大学教授で臨床心理士の長谷川博一さんです。宮崎勉は面会の終わりのほうで、長谷川教授の、「何か希望は」という言葉に対して次のように言ったそうです。

「(世の中に) 伝えてほしい。私が優しいということを」。私はこのニュースを聞いて、ぞっとしました。宮崎勉の言葉は、私の言葉でもあったからです。私は、「自分は本当は優しいよい人間なんだ、周りのみんなは、もっと私を理解しなければならない」、と思いがちだからです。その意味で、私も、宮崎勉も、自称善人です。そして、そういう意味での善人ほど、この世の中で恐ろしいものはありません。あなたは、私の言っている意味がお分かりでしょうか。

さて、先程お読みした聖書の箇所は、私達が「善意に満ち、あらゆる知識で満たされ」ているなら、「互いに戒め合うことができる」と申します。「互いに戒め合う」とはお互いを正しあうことができるということです。そのためには「あらゆる知識で満たされ」る必要があるといわれているのですが、これは、万巻の書を紐解いて知識を増やさねばならないということではなく、イエス・キリストを知る知識のことです。イエス・キリストを知る知識に勝る知識はないからです。逆に言うなら、イエス・キリストを知る知識に比べれば、他のことを知ることなど、簡単なことです。

そして、最後に残るのが、「善意に満ち」ということです。善意に満ちていると、互いを正しあうことができるのです。では、善意に満ちた人とは、どんな人のことでしょうか。それは、初めに申した、単純な善人のことではないでしょう。ここで善意と訳されたギリシャ語の意味を探ってみますと、まず、「正しい」とか「心と生活の正しいこと」という意味があります。次に「心地よい」という意味があります。確かに人の「善意」は私たちの心に心地よいものです。しかし、その果てに、「有用な」とか「質のよい」とか、「勝れた」とか「立派な」とかいう意味が立ち現れてまいります。善意に満ちた人とは、単なる善人のことではなく、良質の、立派な、人の役に立つ人のことなのです。

今申したような意味における善意に満ちた人は、単なる善人のように「自分のやっていることを善だと信じて、自分を疑わない」というようなことはありません。自分の問題点を常に見つめます。自分を正義の味方と思い込んで、世の中の悪をあげつらい、糾弾するだけというようなことはありません。立派な善意に満ちた人は、世の中の悪を、自分の中に見ようといたします。世の中が悪ければ、自分が悪いのだと、善意に満ちた良質な人は考えます。そのような立派な人は、他者を問題視する前に自分を問題視いたします。そして、そのような良質な、立派な、善意に満ちた人々の交わりにおいては、「互いに正しあう」ということが出てきます。互いを高めあうことができるのです。ここから、私は「切磋琢磨」という言葉を思い出しました。切磋琢磨という言葉は、元々は中国最古の詩集である『詩経』の「衛風(えいふう)・淇奥(きいく)」に出てくるそうですが、それがこれも中国の古典である『大學』の伝三に次のように引用されます。

詩云、瞻彼淇澳、菉竹猗猗。有斐君子、如切如磋、如琢如磨。瑟兮僩兮、赫兮喧兮。有斐君子、終不可諠兮。如切如磋者、道學也。如琢如磨者、自脩也。瑟兮僩兮者、恂慄也。赫

兮喧兮者、威儀也。有斐君子、終不可諠兮者、道盛德至善、民之不能忘也。

まず読み下（くだ）します。

「詩に云う。『彼の淇澳（キイク）を瞻（ミ）れば、緑竹（リョクチク）猗猗（イイ）たり。有（げ）にも匪（あざや）かなる君子は。切（せつ）する如く磋（さ）する如く、琢（たく）する如く磨（ま）する如し。瑟（シツ）たり僴（カン）たり、赫（カク）たり喧（ケン）たり。有（げ）にも匪（あざや）かなる君子は終（つい）に諠（ワズ）る可（べ）からず』と。切（せつ）する如く磋（さ）する如しとは、学を道（イ）うなり。琢（たく）する如く磨（ま）する如しとは、自ら修むるなり。瑟（シツ）たり 僴（カン）たりとは、恂慄（シュンリツ）なり。赫（カク）たり喧（ケン）たりとは、威儀なり。有（げ）にも匪（あざや）かなる君子は終（つい）に諠（ワズ）る可（べ）からずとは、盛徳至善、民の忘る能わざるを道（い）うなり。」

これを、現代語訳致しますと、だいたい次のようになります。

「詩経には次のような詩がある。『淇（き）の川の川岸には、緑の竹があおあおと茂っている。才能が輝いている君子は、切り出されて磨かれた象牙のごとく、原石から取り出され磨かれた玉石のごとく、優雅に、光り輝いている。才能が輝く君子のことは、忘れることができない』と。『切り出されて磨かれた象牙のごとく』というのは、道を学ぶということである。『原石から取り出され磨かれた玉石のごとく』というのは、自らを修めるということである。『優雅に』というのは、かしこまる気持ちを持っているということである。『光り輝く』というのは、自信を持っているということである。『才能が輝く君子のことは忘れることができない』というのは、徳があり善に至った人のことは、民衆は忘れることができないということである。」

「切する如く磋（さ）するが如く、琢（たく）する如く磨する如く」というのを、分解すると次のようになります。すなわち、「切」は、小刀や鋸(のこぎり)で骨や象牙を切り出すこと。「磋」は、その切り出した素材を鑢(やすり)や鉋(かんな)で削ったり研いだりすること。「琢」は、玉や石を槌や鑿(のみ)で打ち叩くこと。「磨」は、その打ちたたいた玉や石を、砂や小石ですり磨くこと、です。このような言葉を使って、『詩経』では、素晴らしい細工品に喩えて、紀元前8世紀に活躍した衛の武公という王様（西周から春秋時代）をたたえているのだそうです。そこから、切磋琢磨という言葉は、学問や精神・人格を磨くことを意味するようになったようです。

ところで、同じ切磋琢磨という言葉が、孔子の論語に出てきます。『論語』學而篇第一の十五に曰く、

子貢曰、貧而無諂、富而無驕、何如。

子曰、何也。

未若貧而樂、富而好禮者也。

子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨、其斯之謂與。

子曰、賜也、始可與言詩已矣、告諸往而知來者。

読み下すと、こうでしょうか。

しこう、いはく、まづしくしてへつらふことなく、とみておごることなきは、いかん。

し、のたまはく、か、なり。

いまだまづしくしてたのしみ、とみてれいをこのむものにはしかざるなり。

しこう、いはく、しにいふ、せつするごとく、さするごとく、たくするごとく、まするごとくとは、それこれをこれいふか。

し、のたまはく、しや、はじめてともにしをいふべきのみ、これにおうをつけてらいをしるものなり。

現代語訳すると、こうでしょうか。

子貢が言っていた。

貧しくてもねたまず、豊かであっても傲慢でない態度は誉められた態度でしょうか？

先生が答えた。いいねー。

しかし貧しい中で楽しみを見つけ、豊かであっても礼儀を好む態度には及ばないかな。

子貢がいう。

詩経に切磋琢磨と歌われていますが、それはちょうどこのことですね。

先生が言った。

うんうん子貢よ、それでこそ共に詩の話ができるね。

詩を聞いて、私の話のあとの事までわかるのだから。

論語においては、切磋琢磨は、「どんな環境でも立派な態度をとることのできる立派な人間になること」というような意味に解されているようです。ここに至って、『詩経』や『大學』においては、素晴らしい細工品のように光り輝くことが讃えられていたのに比べて、なお一層、人間の内面のことに事柄が深めて捉えられているように思います。そして、そのような人間の心の態度については、これまたパウロ先生がフィリピの信徒への手紙の4章11節から13節で教えてくださっています。

口語訳では、次のようです。

わたしは乏しいから、こう言うのではない。わたしは、どんな境遇にあっても、足ることを学んだ。わたしは貧に処する道を知っており。富における道も知っている。わたしは、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に処する秘けつを心得ている。わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる。」

新共同訳では次のようです。

「物欲しさにこう言っているのではありません。わたしは自分のおかれた境遇に満足することを習い覚えたのです。貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処できる秘訣を授かっています。わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。」

私は、確かに教会は切磋琢磨の場だと思いますが、「どんな環境でも立派な態度をとることのできる立派な人間になること」を目指す場だという風に限定することはないと思います。そしてまた、修練すればそうなりうるとも思いません。その意味では、切磋琢磨という言葉を持ち出さなくてもよかったのかもしれない。実は私が切磋琢磨という言葉、この説教において持ち出したのは、お米を研ぐ行為を念頭においてのことでした。米を研ぐとはいいます。この研ぐという字は、切磋琢磨の磨という字とワンセットで研磨という言葉になります。よく研いだ米は、磨かれて実に美しく光っています。私は昔、寿司屋で働いたことがあります。いわゆるアルバイトのようなものでして、もちろん寿司を握らせてなどもらえません。皿洗いと米を研ぐという仕事を与えていただきました。それで、よく研いだ米の美しさを少し知っているのです。

さてそこで、私たちは福音温泉の湯であると同時に、教会という炊飯器の中の米粒でもあると思うのです。この米粒が教会の中で主イエス・キリストにあってよく擦（こす）りあわされて、どこまでもどこまでも、これでよいということなく、切磋琢磨されていくのだと思うのです。

教会は、主イエス・キリストにあってまことの善人にされた人々が互いに接しあって、ますますその人格に磨きがかかる場であるに違いありません。パウロ先生が、「兄弟たち、あなた方自身は善意に満ち、あらゆる知識で満たされ、互いに戒めあうことができるこの私は確信しています」と仰っているのは、そういうことではないのでしょうか。福音温泉なる教会は、単にぬるま湯に浸かってふやけるところではなく、内的、外的に切磋琢磨される炊飯器でもあるのです。実に、福音温泉なる教会は、みんなで愛と善意の湯船にどっぷりつかって、それでいて互いに正しあい高めあうことのできるところでございます。お祈りいたします。

祈り 神様、私たち全てを今日また新たにあなたの前に裸になって、あなたの愛の懷に飛び込ませてください。この祈り、主イエス・キリストのみ名によってみ前にお捧げ致します。